

地域の課題 研究者も考えます

12

土地利用



三宅 良尚 研究員

変化への対応迫られる茶の生産

松阪市の農業において、茶は主要な産品であり、飯南、飯高地区を中心として生産が続けられてきた。

ペットボトルから茶を飲むのが習慣となる中で、大型機械を導入、生産を維持してきた鹿児島県が産出額で日本一となった。このように茶農業においては、生産、消費で進む変化への対応が差し迫った課題となっている。

生産量で鹿児島、静岡に続く三重県だが、その量は縮小傾向にある。この状況に対応して市内では、地域の茶農園をまとめて管理する企業が登場し、独自のブランド化を進めている。調査からこれらは、全国平均以上の生産性を持ち、効率的な生産をしていることが分かった。



松阪市内の茶農園。時代の変化への対応が、差し迫った課題になっている

多層的なブランドに可能性

企業の一つを訪問した時には、有機栽培にも取り組んでいるという説明を受けた。有機茶の需要は堅調な傾向が続いており、輸出を含む販路の拡大が見込まれる。さらに、地域レベルで茶のブランド化も試みられている。

三重県産のお茶は「伊勢茶」として特許庁の地域団体商標に登録されている。また、松阪市産の深蒸し茶は「松阪茶」としてブランド化が推進されている。幾重にも積み重なるブランドを整理する必要が生じていると言えるが、伊勢街道、和歌山街道などの歴史的遺産や、地域独自の産品の性質、生産方法を登録する地理的表示の活用も、一考に値する。

地域の多層性に着目した松阪茶のブランド化は、その国内外の需要拡大、生産の安定だけではなく、伊勢茶ブランドの推進にも貢献すると考えられる。